

稱讃 二五六号

二〇二四年四月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

HP shousanji.com

二〇二四年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

さいほう じゅうまんおくぶつど す
これより西方、十万億仏土を過ぎ
て、世界あり。名づけて極楽という。
その土に仏まします。阿弥陀と号
す。今、現にましまして、法を説き
たまう。

『仏説阿弥陀経』

春を告げる強い風が吹き、仏旗が音を立てて靡く日、お彼岸期間の初日に当寺の秋のお彼岸会を迎えさせて頂きました。

中木原さん、高橋さん、早崎さん、山下さんが、お参りしてくださいました。ようこそお参り、ありがとうございます。

おつとめは、六月一日の「東組 親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要」でおつとめする予定になつております『新制 御本典作法』の「正信偈（和讃譜）をおつとめいたしました。



お話しは、「縁起」「宿業」「業」について、私たちは、普段、本来の意義を知らずに、間違った認識を植え付けられているのではないだろうかということを踏まえて、お話しさせていただきました。

親鸞聖人は、「宿業」という言葉は著作には一切使っておられません。（後で調べたところ、「輪廻転生の言葉も見あたりません。」が、私たちは「宿業」を過去世からの自分の業（行い）による報いの現れだとか、「輪廻転生」が実は仏教から起ったものと思つていますが、本来の「縁起の理法」からすると、間違つた思い込みに過ぎないのです。このことは、「縁起の理法」そのものも間違つて思い込んでおり、私自身が種々の縁によつて起っている「無我」のはずなのに、私という「我」は不変であると思ひ込んでいるからだとも言えると思います。

よく「物語」を紡ぐと言います。現実のこと、体験したことを物語っていくことは大事なことだと思うのですが、宗教的体験、「救い」の体験を言葉に表して物語することは、ものすごく危険なことでもあろうかと思ひます。

私たちは、「お浄土」と曰ころから、ある意味、違和感もなく、使っています。テレビのお葬式の場面では、「お浄土」と聞いたこともありませんが、仏前のお葬式でも殆ど「天国」と言っています。一般的には、「天国」と言おうが、「浄土」と言おうが、「地獄」に対する

稱讃寺 春季彼岸会法要

〈日時〉

三月十七日(日)午後二時より

〈日程〉

一四:〇〇 おつとめ

・『御本典作法』

・お焼香

・表白

・『新制 御本典作法』

・正信念仏偈(和讃譜)

・念仏 十一句

・伽陀回向

一四:五〇 法話(住職)

・恩徳讃

一五:三〇 茶話会

一六:〇〇 解散

「あの世」素晴らしい・いい人が生まれる世界との認識であります。そう言いながら、私たち自身にも「罪福信」(罪福を信じる心に満ちている)から、お浄土を「あの世」と相対化して捉えているところがあるようです。

「功德を積みめば、お浄土に往ける」「お念仏すれば、お浄土に往ける」と言われているからと申せば、倫理的にも分かり易いのです。

「仏説」と言われるお経も、ある意味、物語でありましょう。表紙の表記のお言葉は、『仏説阿弥陀經』のお釈迦さまが舍利弗に向けて最初にお話な

された御文です。

「これより西方、十万億仏土を過ぎて、世界あり。名づけて極楽という。その土に仏まします。阿弥陀と号す。今、現にましまして、法を説きたまう。」

『仏説阿弥陀經』は表面的には「お念仏すれば阿弥陀さまのお浄土に生まれる」ということが説かれています。

「仏説」とは、言葉では言い表せない「真理・真如」を、あえて、具体的に言葉にして、私たち凡夫に「真理」を知らせようとしている「方便」なのです。(「嘘も方便」ではなく、「有相も方便」なのです)。単に物語とは、異なるものであります。

今日は、お彼岸ということ、お中日は、本当は若干ずれているらしいのですが、太陽が真東から真西に沈む日であります。その真西の十万億土過ぎたところに極楽(親鸞聖人はあまり好んでお使いにはなっていないようです)つまりお浄土と言う処があると説かれます。「極楽」と表現した方が、「楽の極まり、最上の楽しみ」と想像しやすい。でも、安易な想像で終ってしまうのが私たち。

何故、「西」なのか。東西南北・上下の世界(十方・十方)の世界に無数の仏さまがいらつしやるのに、何故、西であり、阿弥陀さまなのかと説かれるのか。夕日を見て、寂しい・怖いと仰った方もおられます。人生に例えると、東の方角は、この世に生まれて来る方向を指し、この世の人生の始まりに例えられます。一方、西はその逆で、この世の命が終る方向、つまり「死」を想像するものです。

「西」という漢字は、鳥が自分の巢で、羽を休めている姿が元となった象形文字だそうです。私たちも自分の家で寝つ転がっている姿とは、どういう状況でしょうか。「寛ぐ」「安心する」と言うこと

でしょう。「西」とは、単に方角を言うのではなく、「安心」を意味するもののなのです。しかし、「西」「死」を連想する私たちは「死」は怖いものと思っていますから、その方向には行きたくないと思っております。気づこうが気づくまいが、私たちは東から誕生して、いろいろな心身の世界を体験します。南に居る時は、意気揚々としています。北に居る時は、意気消沈しています。上の世界に居る時は、何かに成功して有頂天になっています。下の世界に居る時は、失敗して落ち込んでいます。お経では、私の心の状態がどうであれ、そこには必ず仏さまがおられ、その仏さまが一樣に、「必ずあなたは西方の阿弥陀さまに救われます」と呼んでおられるのです。「極楽と名づける」に対して「阿弥陀と号す」と説かれています。「号す」とは、阿弥陀さまご自身が、私が「南無阿弥陀仏」とすと名告っておられるということです。

「十万億土過ぎて」とは、ある数学者が計算したら、光の早さで十千年かかる距離だそうです。想像できないし、私から行ける距離では到底ありません。別な表現では「三千大千世界」を超える世界だそうです。『仏説観無量壽經』では、「ここを去ること遠からず」と説かれます。これは距離を言っているのではないのです。阿弥陀さまは「今、現にましまして、法を説きたまう。」とは、私の想像を超えて、既に、私のもとに來たっておられ、南無阿弥陀仏と私を常に読んでくださっておられると彰しておられるということです。

間違った「業」感に執られる私たちです。それを解放してくださいのが、阿弥陀さまの大智大悲なのです。

翌十八日、福井恒彰さんの御往生の報に接しました。

特集 金子大榮師の「領解」③

「往生と成仏」③

ところが、凡夫に思慕されているところの往生浄土という浄土は、どう考えてもまず別な世界と考えなければならぬでしょう。此の世界でなく他界であります。他界という言葉は仏教にないけれども、凡夫の感じからいえば、他界、別な世界であります。

それはだんだん追究してゆけば、超越した世界であり、あるいは、今日の言葉をもってすれば、高次の世界、次元の高い世界であります。

浄土からこの世を見ることはできません。清沢先生から浄土を直接に見ることはできません。清沢先生の言葉を用いれば、無限より見れば有限の外にある。先生の言葉もいろいろ練りなおさねばならぬ面があります。しかし大体これは動かぬところでありましょう。有限の智慧はいくら重ねてみても無限に達することはできません。外にある、ということは超越しているということでありましょう。無限は超越の世界であります。しかし、無限から見れば有限は無限の内であり、浄土から見れば浄土の視界に立って見れば、この世を見ることができると、ということになりましようか。この有限無限の関係は、先述の高次性ということが如何なるものなるかということが、明らかにされた私共には、何ら疑うべき余地はないのです。柄にもない哲学じみたことをいうけれども、先生の言葉を出しましたから、それについていいますと、有限無限の関係について「宗教哲学骸骨」でも

いつておられますが―その無限とは何んぞやということは、恐らく仏教では、直感的、感情的には解つていたのでありましようが、理論的に解らせたのは、やはり西洋の哲学であるかも知れぬのです。有限と無限とはその意味において次元が異なるのです。だから有限を如何に限りなくつみ重ねても、決して無限にはならない。兆の兆倍というようなことをいっても結局有限であります。日本国の何兆円という予算を一厘二厘と数えたら、一生涯かかつても数えつくせないだろうが、それでも有限は有限であり、数え得るものであります。しかし、無限は数えることと不可能なものであります。あらゆる有限がいくら数え切れんものであつても、たとえ兆の兆倍というようなものであつても、それを有限なるものとして、それを包んでゆくものこそ、無限なるものであります。だから無限というものの立場と、有限というものの立場は、全然別なものであつて、無限なるものの方からは有限なるものを包むことができるけれども、有限なるものは無限のほかにあるのであります。

数学者が無限を初めて見出したことは、大変なことであつた訳でしょうが、その後で、無限とは何ぞやということがわかつて来たら、今度は有限とは何ぞやということが、もう一つ問題となつて来たんでしよう。これは面白いことです。無限とは何ぞや、と追究していたが、しかば有限とは何ぞや、有限とは無限と対応し、無限なるものを内に感じなければ有限でない。有限は無限を予想しなければ有限とはいえない。こういうことは、わからぬながら、そういうことを言つた書物を読んで面白く感じました。何故かという、宗祖聖人に「真無量」と

いう言葉があります。「真無量を帰命せよ」という言葉です。兆の兆倍というようなことは、無限といつても、偽無限であります。真無量なるものは、あらゆる有限を包むものでなくてはならぬのです。宗祖聖人は和讃に「真無量を帰命せよ」と真の字をつけておられます。「阿弥陀」という言葉の意味は「真無量」を意味するのであります。

それに対して、「有量の諸相ごとく」とあります御和讃の左訓に「ヨロゾノシユジヤウナリ」とありますように、我等衆生のことば「諸相において有量」であります。命も有量、身も有量、意識の働きも有量、何もかも有量であります。かくて如来と衆生との間柄は、如来から見れば、我等衆生は如来の智慧の内にあり、あるいは、慈悲の内におさめられ、みられてゐるのであります。しかし、我等衆生の方からいえば、如来は全く超越したものでなくてはならないのです。しかし、その超越した真無量なるものと、有量なる我々とは、帰依という働きによつて、この二つの対応があるのであります。清沢先生は対応という言葉を使つておられますが、曾我先生は感応といつておられます。感応という方が、も一つよいでありましよう。感応―感によつて応ずる―その働きがあつてそこに阿弥陀仏と我等衆生との間柄を見出すことができるのであります。

かくして浄土とは何ぞやといひますと、此の世のほかにあり、超越する彼方にあり、と。また此の世とは何ぞや。浄土を場所とし、そして見られたる世界、浄土に心をおいて見られたる世界であるといつてよいでしょう。いずれに

しても、浄土は此の世を超えてあるものです。しかし、この浄土は此の世を超えてあるということと、此の世のほかにあるということとは、同じようであらうか。清沢先生は、無限は有限のほかにあるといわれたのであるから、ほかにあるということ、超えてあるということと同じでありましょうか。それともこの世のほかにある、あるいは、他界という言葉の感覚と、超えてあるという言葉の感覚とが、そうはつきりしないところに、そこに何かあるのではないのでしょうか。

退屈してしまつて、やはり娑婆へ帰りたくなつた、などという野次のような批評の出るのは、結局、他界と考えられているからであります。他界というものは同じ次元にあるようでありま

するかにあるのでしょうか。台所仕事も行動であるし、庭掃除も行動であらうが、しかしあれは人間の行動といつては少々仰々しい。やはり台所仕事、掃除などをしてゆくところには、女性的生活というものがあるといふべきでしょう。だから、生活仏教とでもいうか、日常生活の上に行こうとするところに浄土教というものがあり、そして何をすべきかという所に聖道仏教があるのだといつてもよからうと思うのです。

そういうことを明らかにするのは、恐らく、

は良きにも従い、悪しきにも従うという、その

とにかく、私達は今日では超越の世界であるということを強調いたします。これは浄土論に「勝過三界道」とあり、曇鸞大師のご註釈をみても、確かに超越する世界であります。欲界でも、色界でも、無色界でもない、そういう世界を超えてある超越の世界であるということですから、我等凡夫が浄土を願う時の、きわめて素朴な感じとしては、他界でありましょう。浄土教が知識人に容れられるかどうか、という問題もここにあるのでしょうか。超越の世界であるというならば、中にはそんなものはないという人もあるかも知れぬが、本当の知識人ならば否といえないでしょう。超越の世界があり、阿弥陀という真無量のものがあつて、はじめて有量が意味をもつのでしょうか。浄土があつて、はじめてこの世のあり方がわかるのだというふうに、超越の世界に対して、今日の知識人も否とはいわぬと思います。

観無量寿経でありましょう。東本願寺は「現代の聖典」というようなことで観経の序分をしきに用いているが、あれもいろいろ考えさせられるが、とにかく、観経における浄土は一体他界なのか、超越界なのか。その点で観経のよさ、凡夫らしい聖典であることを思うのであります。観経は韋提希夫人を主として説いている經典であるが、韋提希の身の上を考えると、いろいろなことが考えられます。第一に女であること、このことは浄土教を理解する上には忘れてならないことであります。どちらかという

た時「あなたそういうことをしてはいけません」位は仰言つたかも知れぬが、どうも敢えて意見する賢夫人ぶりは出ておらない。ハイハイと言つた次第でしょう。又、占つてみたら、「どうもこの王子はお生まれになつてもあなた方の為にならぬ」といわれると、それでは塔から生み落とそうと王にいわれ、「いや、子をそだねない。何か夫の考えをまげないで、ついていくのみ」というところに韋提希は賢夫人ではない。しかしこういう賢でない振舞で夫が助かるのか、或いは賢夫人によつて夫が救われるのか

しかし、浄土教に説いてあるところは、浄土は他界であります。もう一つ、別な善い世界であるというふうに説いてあるように感ぜられます。浄土へ行つてみたが、余り結構で、終には

ういうことをするかというより、どんな生活をするかというより、やはり娑婆へ帰りたい、

ういうことをしでかすか、というところに男性の男性たる所以があります。女性はこれに對して生活にあるといつてよいでしょう。女性はど

それは問題でしょう。近頃は賢夫人だけの世の中になったんだから、これは婦人の方々にも考えて貰いたいことであります。

ところで韋提希は単なる夫人でなく王妃であつた。そこに一つの誇りがあつたと考えねばならぬものがあります。流石に賢夫人ではなくても、氣位というものがあつたと考えていいのです。これは重要なことです。たとえ、夫に対しては良妻であることができない女性でも我子に対しては、子と運命を共にするというのが母性愛でありまして、子供の責任を全部荷負うて、子が罪を犯せば自分が悪かつたのだと考える、それが母であります。その母であつたということが、夫を牢に入れ、自分をも殺さんとした、その我子の行末を韋提希に案じさせている。父にそむくような我子はどうなつてゆくのか、罰当り奴、どうでもなれ、とはいわずに、わが子の行末が案じられるという韋提希であつたことを念頭におかねばならないのであります。

更にもう一つ申さねばならぬのは、一応は御信者であつたということです。韋提希は頻婆娑羅王と一緒に靈鷲山に通い説法を聞かれた。靈鷲山の麓には、韋提希と王の通われた道に馬車から降りられた場所が残つていたと、西域記が何かに載っています。それは伝説であるとしても、ともかく、多くの經典を聞かれたのです。あるいは大無量寿經を聞かれたと考へて差し支えないでしょう。その御信者が迷つた、そして救いを求められた、そこへ来られたお釈迦様はどういうお釈迦様であろうか。觀經を読んで縷々思うのですが、この場合に何故に釈尊は

お前は平生仏法を聞いておりながら、今頃になつて何をうろたえるか、人間の人情なんてこんなものだ。朝に親しんで夕に背くという、怨親常ならざることが凡夫の世界というものだ。今更驚くとは平生何を聴聞していたのか、と仰言つてもよさそうなものなのです。あるいは、これが世の中なんだから、もう世の中を見棄てて、頭を剃つて尼になつたらどうか、と何故いわれなかつたのでしょうか。釈尊は女性が何か訴えるのを見ると大抵頭を剃らされたのだから、韋提希夫人の場合に、何故尼になれといわれなかつたのかと考えると、愛しい子故に迷う親心で、釈尊も迷われたと思われまふ。迷える仏陀というものもあるんだ、と思いたいののであります。仏陀が迷うということがあるかということとは言葉の上において確かに矛盾ですから、ここは間違ひのないように受取つて貰いたいのですが、迷える仏ということとは、迷いを了解せられたということであり、迷つてゐる人の心がよく解つてみれば、自分もまた迷わずにおれないというのが、それが「無縁の慈悲」というものでありましよう。

大事な処で似つかぬ話かも知れませんが、吉川英治の「宮本武蔵」の中にお通という女性がでてくる。このお通に沢庵禪師が、お前いくら武蔵の後を追つても、彼は剣道一筋で、お前のことなど考へていないのだから、お前も武蔵を忘れて、自分の道を見つけてはどうか、というています。するとお通は「私は沢庵様のお心が解らない。沢庵さんには私の心は解らない」とこたえています。大変に面白いことだと思ひますね。確かに沢庵が説き伏せようとする、その出離の一大事は、生死を超えろということこそ

大事なことであるんだが、その説くところをお通はわかりません。沢庵もまたお通の心は解らぬのです。もしお釈迦さまが韋提希夫人に、さあこの際だから出家せよ、と仰言るならば、お釈迦さまと雖も、韋提希の心は解らぬといつてよいでしょう。同時に韋提希にも釈尊の心はわからぬということになつたでしょう。

じんりきほんがんぎゅうまんぞく
神力本願及満足
みよりようけんごくきょうがんに
明了堅固究竟願
じひほうべんふしぎ
慈悲方便不思議なり
しんむりよう きみよう
真無量を帰命せよ

(浄土和讃 讚弥陀偈讚 三八)

智慧の光明はかりなし
有量の諸相ことごとく
光暁かぶらぬものはなし
真実明に帰命せよ

(浄土和讃 讚弥陀偈讚 四)

「無縁の慈悲」
「私がさびしいときに 仏さまはさびしいの」
(金子みすゞ氏の歌「さびしいとき」の一節)

金子大榮師の男性女性の性質の分け方には、現代には不適切な面があると思ひますが、当時の一般的な認識から述べられたものであるでしょうし、警鐘めいたところもあると思ひます。經典が出来た時代、そして現代を踏まえて、經典が示す本意を聞いて参りましよう。

仏教的な「尊厳」の解釈②

『生死の仏教学「人間の尊厳」とその応用』

木村文輝氏著

(二)縁起にもとづく人間観

仏教の立場では人格の存在を認めることができない。このことは、先に述べたように「空」の思想から帰結される。だが、それは輪廻の思想からも導かれることである。と言うのも、人間は六道輪廻の一環として、他の様々な生き物とともに永遠の生と死を繰り返している。その中で、人間として生まれるのは単に諸条件が重なったことによる偶然にすぎない。それ故、人間だけが他の生き物にはない人格を持っているとみなすことは不可能だからである。

もともと、近年では輪廻の思想は非科学的であるとして、それを仏教思想の一部として説くことに反対する論者も多い。だが、たとえそうだとにしても、仏教では人間と他の生き物とを等しく「生きとし生けるもの」とみなしており、人間のみに他のあらゆる生き物とは異なる優越性を認めない点では見解が一致している。それならば、仏教では「生き物の尊厳」を主張すべきであり、ことさらに「人間の尊厳」を説くべきではないという原則論が導かれることになるかも知れない。けれども、現実的な問題として、我々は人間を他の生き物と区別することに よって日常の生活を送っている。したがって、ここでは原則論をひとまず置いて、「人間の尊厳」に議論を集中させることにしたい。

では、人間と他の生き物とを等しく見る仏教

の立場から、人格の概念を利用することなく、他の生き物にはない「人間の尊厳」を導き出すことはできるのか。ここで注目するのは、人間は一人では生きていないという事実、言い換えれば、人間は常に周囲の人々との関係性、つながりの中でしか生きられないという事実である。

例えば、我々は自分のアイデンティティーは自らに固有のものであり、自らの中に存在すると考える。ところが、「私」の「私らしさ」とは、他者との相違点を明確にすることによって初めて成り立つものである。また、それは周囲の人々との関係を通して変化していくものでもある。さらに、「私らしさ」が周囲の人々に認知されていなければ、人々は「私」を見てもそれが「私」であるとは認識できないであろうし、それが突然激変すれば、人々はそれまでと同じように「私」と付き合うことは難しくなるであろう。すなわち、我々のアイデンティティーは西洋における人格のように不変の実体ではない。それは「空」なる存在であるが故に、他者との相互関係からなる縁起によって常に変化し続け、他者に承認されることによって初めて意味を持つのである。

だが、それだけではない。人間は一人で死ぬこともできない存在である。人間は自分自身の意識が消失する瞬間を知覚できないし、意識が消失して死亡が確定した後の自分を知覚することもできない。また、人間は自らの死亡の完了を自ら確認することはできないのであり、それを確認できるのは他者のみである。このことを西谷修氏は「「私」は死ぬことができない」と表現する。それ故、我々がたとえ「自分らしい死」や「尊厳ある死」を望んだとしても、それ

は他者にそのように思っ て欲しいという願望に過ぎないのである。

のみならず、死は決して個人に内属し、個人の身体内に閉塞しているものでもない。そうではなくて、「死」は死にゆく者と看取る者との間における関係性から成り立っているのである。ある人間が「死ぬこと」は「死」を形成する一つの要素にすぎない。小松美彦氏が「死は共鳴する」と表現したように、ある者が死ぬ場面では、死にゆく者が看取る者（遺される者）に何らかの影響を及ぼし、看取る者（遺される者）が死にゆく者に何らかの影響を及ぼさずにはいられない。だからこそ、一人の人間の死は、親しい人々にその後長期間にわたるかもしれない悲嘆を生じさせ、それ以外の人々にも、やがて自分の身の上を生ずるであろう死の運命を思い起こさせる。さらに、死者はその後何年経っても遺された者の中に記憶として生き続けることになる。このように、死にゆく者と看取る者との相互に響き合う関係も縁起である。そして、それが可能であるのは、死にゆく者と看取る者のそれぞれのアイデンティティーが固定的なものではなく、外部からの働きかけによってどのようなにも変化し得る「空」なる存在だからである。

(三)「そこに自分と同じ人間がいる」ことの意義

では、縁起の理法にもとづく「人間の尊厳」とはいかなるものであろうか。次にこの点を考えてみよう。

我々は、他者とのつながりの中で、互いに支え合い互いに影響を与え合いながら生きていく

その際、我々は自分自身の生涯を「かけがえのないもの」として生きるためには、周囲の人々との関係を尊重しなければならぬ。言い換えれば、周囲の人々の生涯を、自分のそれと同じように「かけがえのないもの」として尊重する必要がある。そして、そのような態度は「そこに自分と同じ人間がいる」という思いによって支えられるものであろう。このことに関連して

釈尊にまつわる次のような逸話が残されている。ある時、コーサラ国のパセーナデイ王が王妃マツリカーとともに宮殿に登り、王妃に次のように尋ねた。「そなたには、自分よりもっと愛しい人が、だれかいるかね。」この問いに対して王妃は次のように答えた。「大王さま。わたくしには、自分よりもっと愛しい人はおりません。あなたにとっても、ご自分よりもっと愛しい人がおられますか。」この問いに王は次のように答えた。「マツカリよ。わたしにとっても、自分よりもさらに愛しい他の人は存在しない。」王がこの会話を釈尊に報告すると、釈尊は次の詩を唱えて王に応えたという。

「どの方向に心でさがし求めてみても、自分よりもさらに愛しいものをどこにも見出さなかった。そのように、他の人々にとっても、それぞれが自己が愛しいのである。それ故に、自己を愛する人は、他人を害してはならない。」これと同じ教えは釈尊によつてしばしば繰り返されている。

「『かれらもわたくしと同様であり、わたくしもかれらと同様である』と思つて、わが身に引きくらべて、（生きものを）殺してはならぬ。また他人をして殺させてはならぬ。」「すべての者は暴力におびえる。すべての（生きもの）にとつて生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」

釈尊が、自分にとつて最も愛しい者は自分自身であるという王と王妃の主張に同意した理由は、釈尊自身の次の言葉から明らかである。

「もしもひとが自己を愛しいものと知るならば、自己をよく守れ。・・・自己こそ自分の主である。他人がどうして（自分の）主であろうか。自己をよくととのえたならば、得難い主を得る。」

つまり、「よくととのえられた自己」、言い換えれば、他のいかなるものにも操られることのない主體的な自己を見出し、それに従つて生きていることが人間にとつて最も重要な事柄だといふのである。私はここにこそ、釈尊の立場からの「人間の尊厳」が高らかに宣言されていると考える。

しかし、この「人間の尊厳」が真に現成するためには、単に自分自身が自らの主體的な自己を生きているだけでは不十分である。それ故、釈尊は、このことを如実に理解する者は「わが身に引きくらべて」他者に接しなくてはならないと説く。すなわち、人間にとつて最も大切なものが主體的な自己を生きている自分自身であるならば他者からその他者自身に対するのとまったく同じように尊重されることは、人間にとつて最も「かけがえのないこと」になる。言い換えれば他者から「そこに自分と同じ人間がいる」と認められることこそが、他者との関係性、縁起の世界の中でしか生きていることのできない人間にとつては、真の「人間の尊厳」を現成させる唯一の生き方と言えるのではないだろうか。

このことは、それと反対の状況を考えればより明確になるだろう。他者を愛することの反対は、他者を憎むことではなく、他者を無視することである。別の表現を用いれば、「そこに自分と同じ人間がいる」と思わないことであり、目の前の人間を「人間」として扱わないことである。例えば一九四三年、ポーランドの首都のワルシャワでは、壁に囲まれたユダヤ人居住区に閉じ込められた多数のユダヤ人が猛火によつて焼き殺された。その光景を、居住区に隣接する遊園地のメリーゴーランドから、多くの人々があたかも美しい夜景を見るかのように鑑賞していたという。この出来事に関しては、ユダヤ人が虐殺されたこととは別に、それを人々が鑑賞していたことに我々は注目する必要がある。文字通り「人間の尊厳」が奪われたこの出来事は、壁の外側にいる人々の中に、「そこに自分と同じ人間がいる」という意識が欠如していたことによつて引き起こされたことは疑い得ない。そしてもちろん、ナチスによるユダヤ人の虐殺や、戦争における無差別爆撃等の非人道的な行為も、「そこに自分と同じ人間がいる」という意識が欠如しているからこそ生まれる悲劇である。このことから、「そこに自分と同じ人間がいる」と認識すること、すなわち他者を自己自身と同じものとして認める「同事」の姿勢こそが、他者の中に「人間の尊厳」を認めることだと言えるだろう。（次号に続く）

この間のモスクワのコンサートホールでのテロ事件の報道を聴いて、一瞬でも同情の思いを持ち得なかった私です。

稱讃寺四月行事予定

二〇二四年度 稱讃寺 法要・行事予定

四月一六日(火) のんのん法話会 午後二時

四月二七日(土) 築地本願寺親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年慶讃法要 参拝

五月二二日(日) 福井恒彰さんを偲ぶ会

五月一六日(木) のんのん法話会 午後二時

五月二二日(火) 築地本願寺親鸞聖人降誕会 参拝

六月 一日(土) 東組 親鸞聖人御誕生八五〇年・立教
開宗八〇〇年慶讃法要 参拝

六月一六日(日) のんのん法話会 午後二時

七月一五日(月) 歓喜会法要 午後二時

七月一六日(火) のんのん法話会 午後二時

八月一八日(日) のんのん法話会(盂蘭盆会)午後二時

九月一六日(月) のんのん法話会 午後二時

九月二三日(月) 秋季彼岸会法要 午後二時

一〇月一六日(水) のんのん法話会 午後二時

十一月一〇日(日) 築地本願寺宗祖報恩講 参拝

十一月一六日(土) のんのん法話会 午後二時

十二月一五日(日) 報恩講 正午

一月一六日(木) のんのん法話会 午後二時

二月一六日(日) のんのん法話会 午後二時

三月一六日(日) のんのん法話会 午後二時

三月二三日(日) 春季彼岸会法要 午後二時

編集後記(愚案)

福井恒彰さんが去る三月十四日にご往生なされました。福井さんとは、約二十年來の親交があり、初代門徒総代のお一人として、現在も四期継続就任して頂いておりました。

二〇〇八年十一月十六日に奥様の泰子様にご往生なされてから、お一人暮らしであられました。二〇二〇年に泰子様の十三回忌をお迎えなされました。最近、足腰が弱っておられました。昨年の十二月十七日に稱讃寺の報恩講を修行したときは、姉が送迎をいたしました。結局その日が、福井さんとお話した最後でありました。

最初の入院先の病院に見舞いに参りましたときは、お話しできる状態ではなく、いつかご快復(回復でも)なさると思っておりましたが、転医先もわからずに、三週間が過ぎて、お亡くなりになられたことを知った次第です。

ご遺骨は、長野のご実家がお引き取りになられ、私どもも漸くご実家との連絡が取れまして、福井さんとのご縁をお話し致しまして、ご分骨をお預かりいたしました。(お骨に執着するのは、浄土真宗の教えからおかしいのかもしれませんが。私の思いに過ぎないのかもしれないが、そうせずにはおれませんでした)。

五月十二日、「福井恒彰さんを偲ぶ会」を行いたいと存じますので、ご縁の皆さまには何卒、ご参詣賜りますようお願い申し上げます。

「おま^{たが}さま

ゆるされながら生きてい^いる

二〇二四年「心のともしび」四月カレンダーより



「六日(火)午後二時〜午後四時
のんのん法話会

27日(土) 築地本願寺
親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年慶讃法要
団体参拝